

## 審査論文の要旨

日本中世寺院史研究は、中世寺院の特質解明をめざし、個別寺院の経済構造や組織の分析が進められてきた。特に顕密体制論・寺社勢力論の提唱以降、豊富な史料を残して来た東大寺は、中世化の歩みを実証的に跡づけられる寺院として数多くの研究が蓄積されている。荘園領主として、また宗教領主としての中世東大寺像が描かれてきたが、その一方、寺院社会そのものに焦点を当て東大寺の特性を論じる研究は少ない。そこで本論文では、法会・財源・寺僧集団の三つの分析視角から東大寺の寺院社会構造を解明することを目的とする。論文は、序章・本文九章・終章・補論一章から構成される。

序章「中世寺院社会史の視座」では、先行研究の課題と本論文の目的を提示する。従来の寺院史研究は荘園経営、寺院組織、法会・教学などそれぞれの分野において研究が深められ、中世の特質が解明されてきた。しかし研究の分化により、これらの特質が相互にどのように関連しているのかは不明なまま大きな課題として残されている。さらに東大寺史研究においては、組織構造の理解の齟齬、法会研究の停滞、修学研究と寺領研究の乖離などの課題がある。そこで①法会と寺僧集団の関係、②宗教活動を実現する財源構造、③寺僧集団の核となった「惣寺」の形成過程、の三点について解明することを目的に掲げる。

第一部「中世前期東大寺の法会と修学」では、寺僧の宗教活動から寺僧集団の構造を解明する。

第一章「中世前期東大寺の修学振興と学侶」では、十一世紀から十三世紀の東大寺学侶の形成と修学振興との関係について考察する。十二世紀には東大寺全体だけでなく院家の修学振興がなされ、同時に学侶の修学擁護の神として鎮守八幡宮が位置づけられた。鎌倉時代には復興過程で得られた重源系荘園が学侶の修学財源に充てられた。十三世紀までに財源・法会・組織の面で修学システムの整備が進み、供料が学侶の主要な経済基盤となった、と述べる。

第二章「東大寺「十二大会」をめぐって」では、中世前期における東大寺の法会体系を論じた。十三世紀には東大寺を代表する法会として「十二大会」という総称が現れる。個々の法会は十世紀には成立しており、規模や種類も多様で、東大寺の由緒に関わるものが多い。十二大会の呼称は、鎌倉時代の荘園訴訟に際して寺内外にアピールするため唱えられた。十二大会は、学侶・堂衆・寺内諸集団がともに参加するものであり、寺院社会の結集核となった、と指摘する。

第三章「東大寺の法会と寺僧集団—梵網会請定を素材に—」では、奈良時代以来、東大寺戒壇院で行われてきた梵網会という法会について、鎌倉時代に残された僧侶の請定（招集状）を分析した。梵網会には学侶だけでなく多数の堂衆が参加し、職衆のうち講師・読師を学侶と堂衆が分業している。十二大会のうち学侶・堂衆が共に参仕する梵網会・千華会・万燈会などは、学侶と堂衆の接点となっていた。このように学侶と堂衆による宗教的分業により法会が執行されていた、との見通しを述べた。

第二部「東大寺財政構造論」では、宗教活動と諸財源との連関を考察し、財政構造の全体像を解明する。

第四章「十二世紀前半の東大寺別当と鎮西米」では、十二世紀初頭に白河院や仁和寺御室とのコネクションをもつ東大寺別当寛助が、その政治力を活かして太宰府観世音寺を東大寺末寺とし、その所領からの収益を鎮西米として東大寺の財源とすることに成功した。鎮西米は、別当が管轄し寺内の諸財源に充当され、その一部は寺外別当の所属寺院で流用されることがあった。鎮西米は、中世東大寺の宗教活動を支える重要な財源であった、と指摘した。

第五章「鎌倉期における鎮西米の基礎的考察—中世東大寺財政構造の研究のために—」では、鎮西米の運用方法を考察した。十三世紀初頭、三五〇石に固定された鎮西米は別当が主導して運用したが、鎌倉時代後期には院家の請負に移行した。鎮西米は、数ヶ月に亘り断続的に東大寺に直接移送され、東大寺納所で長期間保管された。そのため他財源の代替として流用され、諸法会や行事に臨機応変に配分された。南北朝期以降は、納入の停滞に対応し、運用を得意とする雑掌の請負で確保した、と述べる。

第六章「中世前期東大寺の財政構造と鎮西米—「東大寺年中行事」を素材として—」では、十三世紀末の諸法会・行事とその財源を記した史料を分析し、東大寺の財政構造の全体像とその形成過程を考察する。東大寺の財源は、執行の管轄下にある荘園・鎮西米・寄進田と執行の関与しない院家領・堂家領からなり、多元性を特徴としている。特に12月から6月の用途に鎮西米が、その他は膝下領荘園が充てられるとの補完関係が確認でき、鎮西米は封物の代替財源として、寺内に広く配分された。13世紀までには修学システムの拡充とともに修学を支える供料荘園や諸法会の寄進田が登場し、東大寺財源の多元的な財政構造が形成された、と論ずる。

第三部「東大寺「惣寺」論」では、中世東大寺の寺僧集団が形成した「惣寺」の形成過程とその内実を考察する。

第七章「鎌倉中期東大寺の学侶集団と「惣寺」」では、鎌倉時代中期の別当・院家と寺僧集団との関係に注目し、「惣寺」の形成過程を分析する。東大寺の二大院家に三論宗の本所東南院、華嚴宗の本所尊勝院がある。院家に拠点を置く別当定親とその弟子定済は、積極的な教学振興・院家復興策を推進するが、その反面、寺内での対立を惹起した。学侶集団は、供料の確保のため結集し別当・院家に圧力をかけたが、その過程で「惣寺」意識が形成された。ここに学侶諸階層を包摂した「惣寺」が登場する、と述べる。

第八章「永仁年間の東大寺「惣寺」」では、惣寺権力が確立するとされる永仁年間につき、別当頼助の寺家経営から惣寺の形成過程を論じる。鎌倉政権にパイプをもつ別当頼助のもと、東大寺学侶筆頭の僧が別当代に任じられ、「惣寺」は所領集積を積極的に進める。「惣寺」は鎮守八幡宮の神輿を入洛させた強訴により所領回復を実現した。その背後では、東南院も積極的に相論に関与し、別当・院家・学侶の連携があった。このように「惣寺」の

運動が寺外に拡大した永仁年間を「惣寺」形成の第二段階である、と述べる。

第九章「鎌倉末～南北朝期における東大寺の財務集団」では、鎌倉後期から南北朝期において東大寺の財務活動を担った寺僧集団を分析し、「惣寺」との関係を考察した。鎌倉後期に頻発する寺領訴訟に対応するため、寺内では年預所・執行所・院家の諸組織にまたがる組織横断的な小集団が結成され、財務運営を担った。強訴の際、学侶のなかに宿老と若輩という二つの集団が確認でき、宿老層は上記の財務集団に重なる。惣寺の実務を運営したのは、ここで確認できる組織横断的で可変的な寺僧集団であった、と結論づけた。

補論「「入実」小考」では、学侶が受給すべき供料を凍結し他用途に流用する「入実」について考察し、惣寺が学侶を従わせる強制力として利用した、と述べる。

終章「中世前期東大寺の寺院社会」では、以上を総括し、宗教活動と財源の連関からうかがえる組織集団の形成過程を下記のようにまとめた。東大寺では12世紀に修学振興とそれを支える鎮西米・荘園などの諸財源が整備されるとともに、経済基盤の確立を背景に自律的な学侶集団が形成される。寺内では論義だけでなく、法会が体系化され学侶・堂衆・職人集団の統合の核となった。13世紀後半には、供料の確保を目的に学侶が結集して「惣寺」意識を生み出し、13世紀末期には上層学侶を中核とした組織横断的寺僧集団が「惣寺」を運営する体制が確立した、と結論づけた。また東大寺史のなかで「惣寺」を生み出した13世紀後半を中世化の画期として高く意義づけた。